# 書評

## Robert G. Olson
## An Introduction to Existentialism. 1961

三輪正

アメリカの入門書の特徴である懇切丁寧な解説を期待して、この書を開いたのだが、その期待は一応裏切られなかった。比較的小さな本だが、実存主義の主要問題の解説は要領の良いものであり、解り易い。

序文によれば、この「入門」の目的は「実存主義の立場を概説し、……この運動を哲学史の中に位置づけ、また他の現代の諸哲学の実存主義に対する批判を示すこと」にある。実存主義を全体として一つの思想運動と見なし、客観的に分析して行こうというのである。実存主義入門書をば、愉快な逸話や逆説を織りこんで面白おかしくしたり、また演劇的詩的なものを織りまぜて一種独特のムードをかもし出すようにすることも可能である——しかしそれでは入門書とは言えない、実存主義はやはり思想であり哲学であって、体系的に分析して行くべきである——実存哲学には例えば無化する無のような多くのパラドックス的な言葉があるがこれらの言葉も単に言葉の上で逆説的に見えるだけであって、実際は意味を持つのだ、とも著者は強調している。(p. 56)

キルケゴール、ニーチェ、ハイデッガー、サルトルが実存主義の代表者として挙げられ、この四人について主に語られる。なかでもサルトルからの引用が多い。サルトルが四人の中で最も明晰かつ体系的だとされている。(p. viii) ウナムノ、マルセル、ベルジャエフ、ヤスペルス等も問題に応じて言及されるが、上の四人に比べれば、引用は遙かに少ない。内容は七章に分れ、「価値の方向 value orientation」「人間の条件」「理性と非理性 unreason」「自由」「本来性 authenticity」「他者」「死」をそれぞれ扱う。これらの実存主義的テーマを論ずるのに殆んどの場合著者は、先ず当の問題についての古典哲学やアングロサクソン哲学の見解を与え、次いで実存主義の主張を述べ、最後に実存主義に対する批判を論ずる、という進み方をしている。この書の最大の興味は、かように意識的組織的に、実存主義と、古典哲学ないし非実存主義哲学との弁証を著者が試みているところにあろう。こうした方法で著者は、実存主義が他の哲学と共有するものと、実存主義が独自に持つものとを、共に明らかにしようと企図しているようである。

価値を扱う第一章について見ても、著者は先ずアリストテレス以来の価値観を述べる。幸福とはアリストテレスでは快、富、名誉を兼ね備えることだった。このことは幾らか差異はあれ、スピノザにも、また他の古典哲学にも認められることである。著者によれば実存主義もこのことの例外ではない。ところで他方で実存主義は選択の自由と個人の尊厳とを特に重視し、

危険の中で危険を強く意識しつつ生きることに大きな価値をおく。著者はかように古典哲学と実存主義とを対置した後価値論的に実存主義を批判する。(p. 27) 英米哲学は一般に、基本的価値観は個人によって違うものであり、二次的価値のみが人々に共通的なものだとする。これに対し実存主義は、一方で個人の尊厳を言いながら、基本的価値観はあらゆる人に共通だと主張する。この点実存主義は合理主義の伝統を受けつぐ。それは満足した豚よりも不幸なソクラテスを選ぶ哲学である。かように実存主義価値観の性格を分析しつつ、著者の言おうとすることは、不幸なソクラテスを選ぶことを他人に強制してよいものかどうか、ということにあるようだ（明らさまには言っていない）。第一章の終りで幾らか唐突に「実存主義者のいう内観とは、彼等自身の性向や現代の状況を反映する一組の先入見以上のものではない」と言われている。

不安を扱う第二章においても、上述の方法の特徴は明らかである。実存主義は、欲望の完全な充足への望みを絶つことにおいて、ストアと一致し、有限な生を雄々しく生きることを主張する点でスピノザと共通する。しかし両者と異って欲望を無視することもなく、また無限なるものに高まろうとすることもない、どこまでも有限性に止まる——第二章を要約すれば以上のようになる。

著者の方法が最も典型的に実行されるのは、第三章と第四章とである。第三章は理性を扱っているが実存主義入門書が「理性」を問題にすることはかなり珍らしいことだ。実存主義は非合理主義かどうかはよく問題にされることであり、一般への受取られ方は非合理主義としてであった。著者はこの「神話」を分析的に検討する。理性と認識を論ずるに当って三つの主要問題がある。第一は、人間は何を知り得るか、第二は、人間の知る手段は何か、第三は、知識の価値は如何、の三つである。合理論は第一の問いに対し永遠にして必然的普遍的なものを、第二の問いには心又は知性によって、第三のそれには、知識は自体において価値がある、と答える。これに対し経験論は第一の問いには、特殊な事物とその相互関係を、第二の問いには、物理的感覚によって、第三のそれには、自然と社会とを変える力を得るために価値がある、と答える。同じ三問題に対する実存主義の答えはどうか。第一の問いには、人間の条件を、第二のそれには、不安に基づく直観的内省によって、第三に対しては、人間条件の認識は実存価値の経験のために必要である、というのがそれだ。人間の条件の認識とは、人間の歴史や自然的社会的環境に対する知識を指すのではない。あらゆる時代を通して変らない人間存在の普遍的特徴、その偶然性、特殊性、自由、希望を知ることである。実在主義はかような認識を最高の知恵だとする点、何よりも先ず価値論であり、自然よりも人間により多くの興味を寄せるものである。一体経験論は哲学を行動心理学や社会学に解消しようとする傾向を持っている。しかしそれで人間行動は予見可能になるだろうか。人間の条件そのものが人間行動の予見不可能を示している。人間の行動が予見可能になるのは、人間が本来的自由から逃避し他人から dictate

されることを選ぶ時のみである。行動心理学や社会学は人間行動の予見において必然的に挫折せざるを得ない。かように実存主義は科学的方法が人間に適用できないことを説く。この点実存主義は unreason であり、非合理主義である。しかし人間性の普遍性を唱えるところは、実存主義は合理主義に近い。著者によれば実存主義は決して非合理主義ではなく、最も高い秩序の合理主義に属する。

第四章では実存主義（特にサルトル）の自由論と、英米哲学のそれとが対照させられる。第三章では実存主義に同情的だった著者はここでは一転してサルトルに対し極めて批判的である。人間は本来自由であり、独占領下においてかえってより自由だった、とはサルトルの有名な逆説だが、著者は実存主義が人間の根本的自由を主張することによって具体性を失い抽象に陥いるとしている。英米哲学も人間の自由を言う、しかし常に具体的であり、反省にも自由への役割を認める。「実存主義の誤謬は、……目的を選び達成する能力としての自由を、その極限まで推し進めた結果、それが空虚であることを発見したに止まっていることにある」と著者は言っている。(p. 126)

第五章は、実存主義の最も魅力的な主張の一つである本来的自己(本来性)を論ずる。ハイデッガーの Dasein と Verfallenheit の区別が先ず言われ、次いで彼の最近の立場にも言及されている。しかし真存在についてのハイデッガーの説は明確を欠くとされ、ハイデッガーの唱えるところはプラトンの「国家」の中の説と大変よく似通っていて、プラトンが一者と呼んでいるものをハイデッガーが存在と名づけているのみだと著者はしている。ハイデッガーにとっても本来的人間とは、存在に照明され、存在の守護者たろうとする人間であると。これに対してサルトルの場合、本来的人間とは、不安に由る根源的回心を経て自由を回復した人間であり、存在の守護者としてではなく、世界とその価値及び認識の原因として自己を自覚した人間である、と著者は規定している。

サルトルは二種の非本来性（二通りの嘘つき）を区別する。表面的自我と内面的自我との違いを主張し、内面的自我は表面的自我の如何に拘らず潔白だという主観主義的嘘つきと、すべては必然的に決定されて起る故自分は自分の行為に責任がないとする客観主義的嘘つきとの二種の非本来性（責任のがれ）である。サルトルは前者に対しては、人間は自分がしたこと以外のものではないと主張することによって反駁し、後者に対しては、人間は外界を超越しうるものでもあることを指摘することによって批判する。著者によればかようなサルトルの批判は健康な常識の立場に近いものである。ところで著者は続けて、健康さという点ではプラグマチズムの方が優れているという。

プラグマチズムも実存主義同様、mass culture を攻撃する。しかしプラグマチズムは世界と人間とを多元的に捕え、自由をも具体的相対的に捕える。プラグマチズムから見ると、実存主義はその攻撃する主観主義に逆戻りしているものである。著者はここでは、はっきり英米哲学の伝統に組している。一体サルトルは一方では、人間は自らの過去と未来とであってすべてに

責任があるとし、他方では、人間は自らの過去と未来とではなく全く自由であるとする。しかしまったく対立する結論、すなわち人間の不自由と無責人とが同じ前提から出てき得る。こうして「始め責任と自由との哲学であったものが、無責任と奴隷化の哲学になり」得る。(p. 159-160) 実存主義はプラグマチズムをば、人間の悲劇的条件に対する充分な認識を欠くと攻撃するだろう、しかしプラグマチズムは実存主義をば、悲劇とメロドラマとの区別のつかないものとして斥けるだろう、という言葉で章が結ばれている。

第六章「他者」においても、先ず、人間は社会的動物であると定義したアリストテレス以来のこの問題に対する哲学者たちの態度が述べられる。他者という問題は、哲学では正面から論じられることの少なかった問題であり、デカルト以後の近世哲学はむしろ solipsism の傾向が強い。ところで実存主義は他者を強調する。一般に個人主義的と見られるこの哲学が他者を強調することは、一見奇妙に見えるが、何ら奇妙なことはない。実存主義は他者の存在を前提しており、反省的思考が solipsism に導くとすればその反省的思考が誤っていると考える。実存主義は、神秘主義者やナチのようなロマン的な他者との合一や、アメリカ的協調主義、行動科学的な社会工学等を攻撃し批判する。この点実存主義は個人主義的と見られるのであるが、根源的回心による本来的人間関係についてはその可能性を主張するものであると著者はいう。この本来的人間関係においてなお闘争があるかどうかについては、ハイデッガー、マルセル、サルトルで意見が分れること、我と他者との関係が内的関係であって、物と物との間の外的関係とは異ること（デカルトの場合と逆）、また視線の問題、マゾヒズムとサディズム等のサルトル的テーマもかなり要領よく紹介されている。著者は視線から闘争を説明するサルトルの行き方を無理だとしている。視線があって闘争が出てくるのではなく、闘争があって視線も決るというのだ。プラグマチズムから見ると実存主義の他者問題の設定の仕方は、鋭どくはあるが誤っていると。

「死」を扱う第七章においても、先ず死に対する伝統的哲学の態度と実存主義のそれとが対照される。ソクラテス、キリスト教諸哲学者、スピノザ等いずれも死を無視することを説く。これに対し実存主義は死を強く意識するべきだと言う。伝統哲学によれば死の意識は生命を麻痺させる。実存主義によれば死の意識こそ人間を本来的生に誘う。（死の意識によって麻痺させられるような生は、実存主義によれば死に正面する生ではなく、死から逃避しようとする生である）。両者の間の対立は著しい。

かように実存主義の死に対する態度を古典哲学のそれに対照させた後で、著者は、ハイデッガーとサルトルとの死についての見解をかなり詳細に比較する。サルトルはハイデッガーに多くを負う。しかしハイデッガーが人間をば Sein zum Tode とみなし、死の不安に直面する勇気を持つ人間をば真の個人とするのに対し、サルトルは死そのものよりも責任ということにより多くの関心を払う。彼にとって「もはやこの世にないこと」

よりも「後で悔むような選択をしなかったか」ということの方がより重要である。著者はハイデッガーとサルトルとのいずれが優るかについては何も言わない。ただいずれの説も、人間のこの永遠の問題に対する伝統哲学の解答に飽き足らない人に向けられたものであり、いずれもその主張者のある種の卒直さと勇気を示している、と言うに止っている。そして現代生活に絶望した人々はこれらの説を「人間精神のヒロイズムの記念碑として受け入れるだろう」と附加えている。(p. 212)

以上がこの本の極めて粗雑な概観である。サルトルが中心となっていることは、ハイデッガーやヤスペルス等を通して実存主義に接している人には不満であろうし、またアングロ・サクソン的視野からの解説が入門書としては目立ち過ぎるという非難もあり得よう。しかし英米哲学と実存主義との対照という点では大変興味深い労作である。著者は実存主義をば、プラグマチズム等の見地からしばしば痛烈に攻撃する。ところでその攻撃を通して実存主義に対する多くの同感がうかがわれる。著者はこの入門を通して、実存主義とプラグマチズムとの綜合を目指している、と言って言えないことはない。実存主義はアメリカに受け入れられると、案外、アメリカの伝統と言われる清教徒的な開拓者精神につながって行き得るのではなかろうか。

なお著者はソルボンヌとミシガン大学とに学んだ人であり、現在 Rutgers 大学で教鞭をとっている。

(筆者　京都大学教養部助教授)

## Winspear, A. D., Lucretius and Scientific Thought. Pp. 156, Montreal, 1963

北嶋美雪

De Rerum Natura (以下 D. R. N. と省略) の著者ルクレチウスは、すぐれた詩人としての位置はゆるぎないものとして確立されているにもかかわらず、この詩に盛られた「思想」という知的な面となると、一八世紀になって漸く脚光を浴びはじめたとはいうものの、彼を単なるエピクロスの翻訳者と見做そうとする傾向は依然として続いていると考えて、今こそこの誤りを正し、ルクレチウスの思想の独創性と真の深みを明らかにしようというのが本書の意図である。

ルクレチウスの思想の「独創性」とは、ではどこにあるのか。それは D. R. N. に叙述されていることがことごとく彼の新しい発見であるということを意味するのでは無論ない。それはまず、先行者から散文の形でヒントを与えられたものを、豊かな詩的想像力と熱情とをもって開花させた点に、第二に、彼が依拠する哲学の立場の意義を誰よりも明確に察知した知性の力という点に、つまり宇宙の神的創造の説を徹底的に斥け、その進化論的、反目的論的、反神学的な見方を誰よりも推進させた点に、そして最後に、この世界観を動植物や人間にも適用し、生物及び社会の進化という考えを提出したという、以上の